

建築板金工 宇坂允宏氏

15歳で建築板金工の世界へ。徳島市内で修業を積み、25歳で独立して有限会社宇坂板金工業所を設立。家屋の雨といの製造を中心に、神社仏閣の飾り仕事も受注。鶯の門の飾り金物や慈眼寺の銅板鬼板など(いずれも徳島市)を手掛ける。2006(平成18)年「現代の名工」に選ばれる。現在は、徳島県板金工業組合副理事長として後進の育成に力を注ぐ。

生涯修業。 叩き上げた建築板金の技

1枚の銅板を切り出して曲げ、木つちと金つちでひたすら叩き、造作を生み出すのが建築板金工です。かつては、金属を加工して作る住宅の雨といが建築板金工の活躍の場でしたが、時代が変わり神社仏閣の銅屋根や屋根飾りなどの飾り物へと製作の場が移ってきました。建築板金業に携わって50年。叩き上げの卓越した技能で「匠」として今も現場に立つ宇坂氏に建築板金の技と精神を語っていただきました。

厳しい修業に 明け暮れる日々 25歳で独立、工業所設立へ

宇坂さんが建築板金工の世界に入門したのは終戦後、15歳の頃でした。手先が器用だったことから学校の先生の紹介で徳島市内の建築板金工場に就職。当時はまだ親方・弟子の人間関係



自宅に隣接する宇坂板金工業所。 「1枚の銅板から叩き上げて徐々に形を整えていく過程が面白い」と話す宇坂さん。

係が強い時代。丁寧に仕事を教えてくれるわけもなく、ただ見て、真似て、繰り返して銅板の打ち出しから叩く力加減などを身体で覚えていくしかなかったのです。リヤカーに銅板を乗せて運び、朝から晩まで黙々と厳しい修業に耐える日々が続きました。 やがて長男の稔さんが生まれたのをきっかけに25歳で独立。徳島市内に宇坂板金工業所を設立しました。

住宅の寿命を左右する 「雨仕舞い」のプロとして 仕事に情熱を傾ける

独立後の社員は兄と自分の2人だけ。仕事は工務店発注の雨といなどが中心で、年に2〜3回ほど神社仏閣の屋根施工や飾り物の受注もありました。建築板金工には、雨漏りを防ぎ、住宅の寿命を左右する「雨仕舞い」のプロとしての力量が求められます。その

神社仏閣の 銅屋根、屋根飾りなど 新しい活躍の場が広がる

一つひとつ手作業で作られてきた金属屋根や雨といでしたが、雨といは金属からプラスチックへ、屋根もガルバリウム鋼板など新しい材料が次々と使われ、建築板金工が活躍する場は一部の本格和風建築や神社仏閣の屋根、雨といの施工、飾り物の製作が中心になってきました。

工場でも1975(昭和50)年に大型機械を導入し、作業時間が大幅に短縮されました。宇坂さんは時代の流れに戸惑いを感じながらも、修業時代から最も好きだった神社仏閣の飾り

物の製作で活躍の場が広がることに職人としての喜びを感じていました。

神社仏閣の仕事は何百年と後世に残る仕事。たった一つの飾り物を製作するにも、「自分が納得するまで妥協はしない」と話されます。

屋根飾りは職人の感性も問われます。宇坂さんは、依頼を受けた神社仏閣を実際に見て、どんなデザインにするか、イメージを膨らませます。四国八十八カ所を5〜6回巡り、趣味も兼ねて全国各地の神社仏閣を訪ね、屋根や屋根飾りを見て、その姿形を目と心に焼き付け、研究を重ねました。ドイツやアメリカなど欧米にも足を運び、西洋の技法も長所と思えば迷わず取り入れたそうです。手に叩き込んだ技と

2006年度 「現代の名工」に 建築板金業50年の節目

徳島県内でも「銅板鬼板」と呼ばれる屋根飾りを打ち出す技能を受け継ぐ職人はわずか数人のみです。その確かな技術と建築板金への真摯な仕事ぶりが評価され、2006(平成18)年、「現代の名工」に選ばれました。現在も建築板金工として、毎年実施される建築板金技能検定受験者の教育指導を行い、後進の育成にも努めておられます。

「住まいも神社仏閣も仕事に妥協はありません。建築板金は建築の工程全体では細部の仕事ですが、この細部にも職人のこだわりの技が現れていることを多くの人に知ってほしい。建築板金業に50年以上携わってきましたが、私もまだまだ日々精進です」と笑顔の中心に厳しい職人の顔をのぞかせました。



写真上/雨といの製作には、銅板を「ヒョウシギ」という木の道具で叩いて折り曲げる。写真下/ムダ折りという部分に銅板を接いでいく。折り加減や角度など、技は全て手に叩き込まれている。



何度も焼き、叩く。「打ち出し」「絞り」と呼ばれる工程。銅板に丸みをつける大きな釘は「エボシ」という。



木づちと金づちは厚みや丸みをつける角度などによって使い分け、銅板のひずみを取る。



飾り金物や宝珠など依頼された建物に合う大きさ形などは、目で判断。狂いはない。



銅板の厚み、用途でハサミを変える。刃が反った形の小さいハサミは「エグリ」、大きいのは「ヤナギバ」。